

救急医学の未来を語る

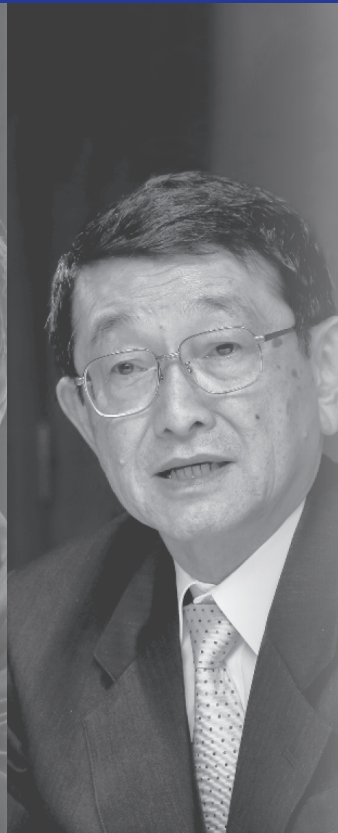
月刊誌『救急医学』通巻500号記念鼎談



横田 裕行 先生

Hiroyuki Yokota

日本医科大学大学院医学研究科
救急医学分野教授



嶋津 岳士 先生

Takeshi Shimazu

大阪大学大学院医学系研究科
救急医学教授



坂本 哲也 先生

Tetsuya Sakamoto

帝京大学医学部附属病院病院長/
同大学医学部救急医学講座主任教授

横田 今回、『救急医学』が500号を迎えるにあたっての鼎談企画にこの3人が呼ばれたのは、私が第44回（2016年）の日本救急医学会総会・学術集会を会長としてお世話をさせていただいたこと、そして、今年第45回は嶋津先生が会長を、2018年の第46回は坂本先生が会長を務められることが、大きな理由の一つであると思います。さらに、坂本先生は今年の第20回日本臨床救急医学会総会・学術集会会長も務めておられます。

そこで今回は、今後の学術集会のあり方について、救急医学全体を見渡す意味でも、意見を交換してみたいと思います。それから、学術集団として学会主導の研究を行うことや、エビデ

ンスの発信、企業と連携した社会貢献なども、学会の役割として問われるところかと考えています。そして、何ととっても新専門医制度がこれからどうなるのか、日本救急医学会としてどのようにとらえていくべきかを考えなくてはなりません。これは、多くの読者の方々もご興味のあるところだと思います。このような議論を通じて、救急医学の未来を少し、考えてみたいと思います。

学術集会の意義

——経験，教育，プログラム

横田 まずは嶋津先生。今まさに先生は第45

回日本救急医学会総会・学術集会の準備をされているところですが、今の時点でどのような学会にしたいのか、どのような方向性をもつべきとお考えか、ご意見をいただければと思います。

嶋津 今回われわれは「救急への想い—Love Emergency Medicine」という、従来なかったテーマを取り上げます。救急医の数が少ないということが、社会的にも、学会としても問題になっていますが、若い人に救急の楽しさ・面白さというのを十分に伝えきれていないのではないかと反省もあります。そこでもう一度、どのような想いをもってわれわれが救急医になったのかを、下の世代や女性医師に伝えられればいいなと、このようなテーマにしました。

横田 特別に学生向けだとか、初期研修医向けとか、もっと若い医師を対象にした企画は考えていらっしゃいますか？

嶋津 まだプログラムの作成は進行中なのですが、従来からあった学生セッションはもう少し充実させたいと思っています。

横田 今、昨年の第44回総会・学術集会の集計をしているのですが、若い先生・学生の参加者や演題応募も予想より多かったのです。だからこそ、救急に関心はあるけれども、ちょっとハードルが高いなという学生・初期研修医に救急の魅力ややりがいを伝える、学術集会はそのためのとてもよい機会になると思います。

坂本先生は、2018年に向けて現段階で考えておられることはありますか？

坂本 たまたま2年続けて、日本臨床救急医学会と日本救急医学会という大きな学術集会の会長を仰せつかることになったので、その色分けについては考えています。

臨床救急医学会は、多職種が対象であるということと、救急医療体制やそのシステム、病院前のメディカルコントロールなどを含めて、救急医療の現場に目を向けていることが大きな特徴ですので、この“多職種”と“医療”ということに少し重点を置いています。

第45回日本救急医学会総会・学術集会

会期	会場	会長
2017年 10月24日(火)~26日(木)	リーガロイヤルホテル大阪 大阪国際会議場	嶋津 岳士 (大阪大学大学院医学系研究科 救急医学 教授)

第45回 日本救急医学会総会・学術集会 ポスター

来年の救急医学会は、横田先生と嶋津先生の学会を勉強させていただいたうえで取り組んでいくつもりですが、やはり専門医制度をもつ学会として教育プログラムの充実が非常に重要であると思います。また、学会に専門家が集まってディスカッションをすることで研究の芽が生えて、それがだんだんと臨床研究に成長していくことが多いと思いますので、そのような研究の種を、蒔いていくというようなことを意識しています。

一方で、自分の若い頃を考えても、学会に行って、症例報告であっても自分の経験を人に伝えて意見を聞き、議論を交わすということが、非常に楽しかったという想いがありますので、そのような若手医師にとっての機会も多く取れるように、バランスをみながら、考えていきたいです。

横田 私も、学会に参加することは自分に足りない部分を知ることと思いい、時にその場では落ち込むけれども、負けないで頑張っていこうという気持ちをもって、若い頃から学会に参加し

学術集会だからこそというような情報や、 ホットなディスカッションができる機会を 提供することが、これからも必要——横田 裕行

ています。

例えば、小濱啓次先生が会長を務められた救急医学会（第18回、1990年）で、杉本侃先生が座長をされ、行岡哲男先生が講演されましたが、そのなかで「パラダイムシフト」という言葉が使われたのです。私にとってはお兄さんのような行岡先生が、現場にいながら全体を見渡し、救急医学という学問体系までを考えて患者を診療しているのかと、本当に衝撃を受けました。学術集会だからこそというような情報や、ホットなディスカッションができる機会をわれわれが提供することが、これからも必要だと思います。

先生方も、今までの学術集会や講演などでインパクトを受けた経験がおありですか？

坂本 書籍や論文を読むのではなくて、生の発表を聴いて、そこでディスカッションをすることは、やはり常に新鮮でインパクトがあり、モチベーションになりますね。

横田 学術集会で座長をしているような普段は雲の上というような先生から質問を受けること自体がすごく嬉しい一方、怖い思いがありました。しかし、きちんと答えられたときの充実感がありましたよね。そのような思いというのは、おそらく現在の若い先生にもあると思うので、だからこそわれわれがしっかりと学術集会のセッティングをしなければなりません。

嶋津先生はいかがですか？

嶋津 救急医学会でいうと、約30年前にHarvard大学のDouglas Wilmore先生が来られて、侵襲学の進歩の話をされたのです。学問の進歩というのは一直線ではなく、ところどころに踊り場があったりと非常に不均一なもので、フェーズが違うのだと。そこに救急医学/医療

の進歩を当てはめておられたことが、ある種哲学的といえますか、日常臨床とは違った見方だと、強く印象に残っています。

横田 ありがとうございます。

学術集会のこれからについても一つ。これまでは研究成果の発表が学術集会の多くを占めていましたが、これからは新専門医制度のなかでの教育（continuing education）が大きな役割を、学会・学術集会で担うことになると思います。一方で、そのためにこれまで会長の裁量で行ってきた試みが制約を受けてしまう部分があり、私自身も少し苦勞しました。このような点について、どのように考えていらっしゃいますか。

嶋津 学会としての継続性と会長の独自性の両立はなかなか難しく、私も悩んでいます。何年か前から始まった学会としての継続的なプログラム作りには、専門医制度の単位を取るための教育的な講習も含まれていますが、あまりそちらに寄ってしまうと、学術集会が単に受講の場になってしまう懸念もあります。

学会のプログラム委員会を中心に、どのような形で継続的なものにしていけるかを考え、そのなかで坂本先生に引き継ぐものも出てくると思います。

坂本 これまでは、シンポジウムなどで白熱した議論の末に結論が十分に出ず、「来年に持ち越して、さらにデータを集めて議論を深めましょう」となりながら、十分に継続されていないということもありました。そのような面では、同じプログラム委員がある程度継続したテーマを出していき、その内容に関して会長ではなく、救急医学会自体がもう少し責任をもっていく必要があると思います。